

〔研究資料〕

パラグアイの日系社会と“NIKKEI JOURNAL”
—日系1世から2世への世代交代と地域社会の変容を見据えて—

藪 耕太郎*

パラグアイへの日本人の集団移住は1936年に開始され、2006年に70周年を迎えた。6000人規模とされる現地の日系社会は、日本語を媒介とした強固なネットワークで結ばれており、各移住地では「日本らしさ」を想起させる様々な行事が行われている。また、現地で唯一の邦字新聞である“NIKKEI JOURNAL”は、パラグアイ国内のニュースを国際的な視野を交えて紹介する一方で、各移住地の現況を詳細に取り上げることにより、日系社会における幅広いニーズに応えている。この点で同紙は、日系社会の紐帯を堅固にする役割を担うものである。しかし、1世から2世へと世代交代が進むなかで、従来型のネットワークは徐々に変容している。日系社会における共通基盤の変化のなかで、今後の“NIKKEI JOURNAL”もまたその立ち位置を再度見直す必要に迫られている。

キーワード：パラグアイの日系社会，“NIKKEI JOURNAL”，日本語と「日本らしさ」，世代交代，社会変容

はじめに

本報告は、パラグアイ唯一の邦字新聞である“NIKKEI JOURNAL”が現地の日系社会に果たしている役割、あるいは現地社会における同紙の位相について、紙面の構成や紙上に展開される言説の分析を通じて明らかにする試みである。

筆者は2005年11月から2006年8月まで16回に渡って「パラグアイの武道家 福岡庄太郎伝」を同紙上で連載してきた。福岡庄太郎（1878-1947）は日本人によるパラグアイ移住の先駆者的存在であり、首都アスンシオンに居を構えた

最初の日本人であった。さらに壮年期以降は私設領事のような役割を果たし、後に移住する日本人たちと現地社会を繋ぐパイプ役として活躍している。それにも関わらず現在では福岡は現地日系社会においてほぼ忘れ去られた人物となっていた¹⁾。そこで“NIKKEI JOURNAL”社の薦めによって、これまで殆ど明らかにされてこなかった福岡の来パまでの経緯と、福岡が現地社会に受け入れられるまでの活動を同紙に記したのである。またこの取り組みは2006年9月に行われた「パラグアイ日本人移住70周年記念式典」事業とも関連するものであり、集団移住以前の個人移住者の足跡を明らかにすることで、70年に及ぶパラグアイにおける日本人移住の歴史に多少なりとも厚みを増す作業となった。

ところでこの取り組みにあたっては、調査を

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程



写真1 パラグアイの武道家 福岡正太郎伝
出典 “NIKKEI JOURNAL” 2006年8月15日付第12面

通じて“NIKKEI JOURNAL”社のみならずパラグアイの日系社会全体と深い交流を持つことができたわけであるが、その交わりにおいて以下の3点においてとりわけ関心を抱いた。

- ①日本語の識字率の高さ
- ②日本文化あるいは日本そのものへの強い関心
- ③①および②を媒介とする日系社会におけるネットワークの強固さ

とはいえこの3点はいわばパラグアイ日系社会の特徴として、移民史を中心とするこれまでの研究において強調されてきた点である。後に詳述するが、各移住地において行政機関としての役割を担う日本人会は日本語学校を運営し、日系人の子弟は高い日本語教育を受けることができる。同時に日本人会は盆踊りや運動会などの日本的な文化習慣に拠るイベントを定期的に主催し、移住者は恒常的に日本文化に接する機

会を有している。また移住地同士の繋がりも緊密で、各移住地共同あるいは対抗のイベントも積極的に行われている。こうして日系ネットワークの内部では各移住地における日本人会が中核として機能しつつ、それぞれの会が相互に連携しあうことによって、ネットワーク全体として日本的なアイデンティティを育む構造が形成されている。

その一方でパラグアイにおける日系社会を語るうえにおいて“NIKKEI JOURNAL”が果たす役割については全く論じられてこなかった。これは従前の研究が同地の日系社会におけるアイデンティティ形成の中核を日本人会に置くことで、日本人会と直接的な繋がりを持たない“NIKKEI JOURNAL”への眼差しが弱まった結果であると考えられる。しかしながら、日本語を媒介とする日系ネットワークにおいて、現地発による唯一の邦字メディアである同紙に期待される役割は決して小さなものではないだろう。また、“NIKKEI JOURNAL”の購読者の大半は当然のことながら現地在住の日系人および日本人であり、同紙の内容も必然的に現地社会に即したものとなるはずである。つまり、“NIKKEI JOURNAL”の紙面の構成や紙上に展開される言説を分析することは、日系社会の様相をこれまでとは異なる観点でみるための一助となるのではないだろうか。

ただし、日本人によるパラグアイ移住が始まってから半世紀以上の歳月が流れており、複数の世代が包括される日系社会をひと括りに論じることが難しい。また、その社会において同紙に求められる役割や位置づけも様々であり、本稿でその詳細を十分に明らかにできるわけではない。しかし、現代パラグアイの日系社会の軸が1世から2世へと移行されつつあり、社会

そのものが変容しつつある現状を踏まえて、同紙の現地社会における位置について報告しておきたい。

1. パラグアイの日系社会における「日本らしさ」の形成

本稿では、パラグアイの日系社会の特徴を示す語句として「日本らしさ」ということばを用いている。なお「日本らしさ」とは、ただ単純に日本語を学び、日本を表象するような文化習慣を受容するだけではなく、そうした文化習慣に内包あるいは付与された礼儀正しさや勤勉さ、あるいは俳句や短歌を吟ずる際における繊細な感受性などといった、しばしば日本的な国民性を表象するとみなされる種々のアイデンティティまでを含んだ意味で用いている。そこで本章では、後段で考察する“NIKKEI JOURNAL”紙と日系社会との関係性をより明確に理解するために、パラグアイの日系社会を結ぶ紐帯の重要なひとつと考えられる「日本らしさ」の形成過程と再生産の仕組みを追っていく。

1-1. 日本人移住地の設立と日系社会のネットワーク

現在パラグアイには約6000人程度の日系人が在住しているといわれている。地理的に南米大陸の中心部に位置することからときに「南米の心臓」とも謳われるパラグアイ共和国へ初めて日本人が入植したのは1912年のことである²⁾。しかし、初期の移住者は個人移住者と呼ばれる者たちであり、外務省による正式な移住記録には含まれていない。

日本とパラグアイの国交は、1919年の日本・パラグアイ通商条約によって開始されたが、パ

ラグアイ移住へ向けた動きが本格化するのは、1934年頃からとされる。それはアメリカに代わる移住地として期待され、また当時最大の移民受け入れ国となっていたブラジルにおいて同年、移民二分制限法が施行され、もはやブラジルも移住するには不適当な土地となっていたからである。パラグアイ拓殖組合による移住地の選定の後、かくして1936年より日本人によるパラグアイへの集団移住が開始された。ラ・コルメナ移住地に始まる移住事業は、その後の紆余曲折を経ながらも、現時点において6つの移住地を建設するに至っている。また、ラ・コルメナ移住地以後の移住地は、大変な親日家として知られたストロエスネル大統領のもとに1959年に結ばれた移住協定に基づく集団移住によるものである。

これら各移住地は諸問題を内包しながらも、相対的には高い生活水準を誇っており、パラグアイ社会において確固たる地位を築いている。一方で各移住地から都市部へ転出し主として商工業に従事する者たちや、あるいは昭和戦後期における集団移住のピーク時ではなく、比較的近年に単身もしくは少数で移住し、前者と同じく商工業やサービスを営む者たちも概ね良好な生活環境を保持しているといえるだろう。また、こうした日系人や日本人移住者のうち幾人かは、パラグアイの政治や経済、商業を支えるうえで極めて重要な地位を獲得、保持している³⁾。ただし、概括的に論じて、パラグアイの日系社会は現地の主流社会に積極的にコミットしているわけではない。それは、現地社会よりも日系社会、パラグアイよりも日本のほうが文化的に優れている、といういわば自民族中心主義的な態度のもとで現地社会と一定の距離を意識的に図ってきたからである⁴⁾。しかし現在で

はこうした状況は崩れつつあり、その点に関しては後段で考察を加えたい。

ところでこうした各移住地、あるいは日本人移住者の集まる空間を語るうえでは「パラグアイの日系人は大人も子供も、アメリカ大陸において有数の日本語に堪能な人たちであり、祖国日本の生活習慣を大変よく反映した生き方をしている」⁵⁾と指摘される。各移住地やアスンシオン、エンカルナシオン、シウダー・デル・エステといった都市部には日本人会（ラ・コルメナ移住地では日本文化協会）が結成され、さらにアスンシオンに本部を置くパラグアイ日本人会連合会が各日本人会を統括している。

1-2. 日本語学校における「日本らしさ」の形成

パラグアイの日系社会を語るうえで特に重要であると考えられるキーワードは「日本らしさ」であろう。ただし入植から今日に至るまでの歴史的な経緯や、受け入れ側の社会が日系社会に与える影響の大小によって程度の差はあるものの、日系ネットワークの基盤のひとつが「日本らしさ」にあることはパラグアイのみに限定されない。しかし、パラグアイにおけるそのネットワークの強固さや緊密さはそれでもなお特筆すべきものである。その主要因としては、他のラテンアメリカ地域における移住地と比べてパラグアイの日系社会は新しく、なおかつ、また意志の統制を図りやすい比較的小規模な集団であり、日本との関係が深い1世が未だネットワークの主要な一角を占めていることが挙げられる。そして彼らが中心となって組織する日本人会が各移住地におけるある種の行政機関となり、日本と現地を結ぶ様々な活動を通じて現地の日系人を統括することで、パラグアイ

の日系社会は「日本らしさ」を根幹に据えるネットワークを維持していると考えられる。そこで本項では、日本人会が関与する様々な活動から特に現地の学校教育を例に挙げて、「日本らしさ」の形成過程をみていくこととする。

パラグアイにおける最初の日本語学校は1936年にラ・コルメナ移住地に建設された。学校教育を通じて父兄は子弟に「日本人の精神であり揺るぎない闘争心である大和魂を心に刻み付ける」⁶⁾ことを願っており、すでに戦前期から日本語学校の主要な役割が日本的アイデンティティの形成にあったことが窺えよう。もちろんパラグアイ社会にも適応できるように、パラグアイ教育省の指導に従って現地式の教育を併行して学んでいたが、日本語学校では日本から派遣された教員のもとで日本式の教育様式が踏襲されていた。その様式は、国語教科書の採用はもちろんのこと、授業の組み方や運動会、遠足といった年間行事などの実施に代表される。当時希少であった日本語図書にはカバーがなされ、さながら巡回図書館のように各家庭を回された。また運動会などの学校行事や、校庭での盆踊りなどの学校を集合の場とする行事は多くの場合、地域全体を巻き込むものであり、不慣れた新天地で開拓事業や農業に勤しむうえで不可欠であった移民同士の団結心を養う絶好の機会でもあった。

戦前期の学校教育は、第2次世界大戦を迎えて中断を余儀なくされる。日本語学校は閉鎖された後にパラグアイ政府に没収され、公的な場において日本語教育を学ぶことは不可能となった。しかし、こうした状況下においても日本語の習熟熱は醒めず、各家庭において密かに日本語教科書を使って学習が続けられた。

戦前期の学校は、当時の移民政策に基づく日

本政府の要請によるものであり、建設にあたっては拓務省パラグアイ拓殖部が主導するものであった。これに対して戦後の学校建設には、日本政府及びその外郭機関からの援助や働きかけもさることながら、現地の日系社会が一丸となった学校再建への取り組みが大きな役割を果たした。

しかし、学校設立に至る過程に差異はあるものの、戦前、戦中、前後を結ぶ学校教育のあり方は、ある程度の一貫性を保っていると考えられる。もちろん、戦前の教育制度は「国体の本義」の国民への浸透という国策プロパガンダの一環であり、パラグアイ移民の再開を通じて1955年に現地に伝えられた教育基本法に基づく戦後の学校教育と等閑視できるものではない。しかし「日本語で意志の疎通を図れるようになり、日本文化をよく理解」⁷⁾することが学校に求められる最大の目的であることは一致している。これは、パラグアイの日系社会が集団として小規模であり、従って日本語や日本を想起させるイベントを通じて強固なネットワークを構成する必要があるためであり、日本語教育と同時に現地社会の全体を巻き込むような大規模なイベントを定期的に開催できる日本語学校がとりわけ重要視されたためと考えられる。またそれは日本人会と密接な関係性を保つことで、常に社会の中核に位置することができ、求心力として作用しているのではないだろうか。

現在、各地域にある日本語学校では日本語スピーチコンテストや作文コンクールが開催されているが、各校で選抜された生徒はパラグアイ日本人会連合会が主催する、より大きな発表会へと進むことができる。そうした場では、パラグアイの様々な地域に住む日系人の相互交流を保つことができるとともに、他地域への競争心

が自らの帰属する地域や学校への愛着心を生む契機ともなる。さらに、連合会の主催するこうした企画の多くは、独立行政法人国際協力機構（以下 JICA）や独立行政法人国際交流基金といった政府による後援を得ており、そこで優秀な成績を収めた生徒は日本へ留学することも可能である。また、かつて奨学金を得て日本に行ったことのある親は、子供が日本式のカリキュラムに則った教育を施されることを期待するとされる⁸⁾。こうして、現地社会における学校教育は、日本語や日本文化に習熟することを願う父兄の思いや日本からの援助を受けて、「日本らしさ」の継承、維持する役割を担うこととなり、子弟は現場においてごく自然に「日本らしさ」を身に纏うようになる。そしてその子弟らが親になると今度は自分と同様の教育コースを彼らの子供に歩ませることを望む。このように、日本語学校で形成される「日本らしさ」は世代を跨いで継承され、循環されることで、一層の強靱さを獲得していくと考えられよう。

2. “NIKKEI JOURNAL”

“NIKKEI JOURNAL”の発行主である高倉道男（ミチオ高倉）氏は1940年大分県に生まれた⁹⁾。1976年に共同農場を建設する目的でパラグアイへ移住したが、その計画は早々に頓挫した。その後の紆余曲折を経て、今操という人物とともに、1980年4月に同紙を創刊している¹⁰⁾。所在地は首都アスンシオンであり、現在は高倉氏による単独経営のもと、タブロイド版16ページ（海外向け12ページ）の新聞を1部15,000ゲアラニー（2006年12月現在で約300円）で月2回刊行している。発行部数は公称3,500部とされているが、高倉氏自身が認めるとお



写真2 “NIKKEI JOURNAL”紙

出典 “NIKKEI JOURNAL” 2006年7月31日付第1面

り、実質発行部数はそれ以下であるとみなされる。しかしそれでも約6,000名とされるパラグアイの日本人移住者のうち、少なくとも40%程度は同紙に目を通してることとなり、この点からも同紙が日系社会に与える影響が決して小さくはないことが推察されよう。

紙面の構成は「国内の政治・経済・社会ニュース3割 パ国内の日系社会ニュース3割 日本および国際ニュースは、速報性よりも週刊誌的な掘り下げた裏読み情報、解説記事的な紙面造りを心がけているページが3割 トピックス1割のページ配分」¹¹⁾となっている。しかし実際の紙面においてはそれほど厳密な区分けがなされているわけではなく、より単純に1面より10面までをパラグアイ国内の政治や経済に関する記事、11面から16面までを日系社会に関する

記事と分類するほうが、理解が容易となるだろう。

そこで本稿ではこの2分類によって論を進めていくこととするが、2005年12月から2006年11月までの1年間に於いて全24回発刊された同紙における内訳は次のようになる。特別号として発刊されている1月の新年特別号を除き、中南米地域と絡めたパラグアイの問題をトップ記事にしているのは8回であり、全体の約3分の1を占めている。また、1面には及ばないまでも重要である記事が掲載される第3面までを合わせれば、全24回192のトピックのうちで47が関連するニュースであり、約24%を占めることになる。なおその他の内訳は、当然のことながらパラグアイ国内に関する記事が約60%で最も多く、次いで日本政府および政府外郭団体と日系社会との関係といった比較的大きな規模での日本—パラグアイ間との交流についての記事が10%程度である。残りの約6%については、サッカーワールドカップやパラグアイ日本人移住70周年記念式典といった、旬の話題や規模の大きな文化的事業に割かれている。

一方で現地の日系社会を取り巻くニュースは基本的には11ページから16ページにおいて紹介されるが、日本政府の要人や国賓にあたる人物が来訪した場合などは巻頭もしくはそれに準ずる面で取り上げられる。2006年に限定すればパラグアイ日本人移住70周年に関する特集記事も多く掲載されており、筆者の「パラグアイの武道家 福岡庄太郎伝」もその取り組みのひとつに数えられるが、とはいえ拙稿の掲載面は常に11面以降であり、トピックとしての扱いではない。ともあれ拙稿を含む特集記事はあくまでも短期間のものであり、その点で特例の範疇に属するものと考えられることから、本報告では言

及しない。

ところでこうした紙面作りをすすめるうえで、“NIKKEI JOURNAL”は以下のような編集方針を掲げている。

『コラソン・デル・スールアメリカ』（南米の心臓・ハート）と呼ばれるパラグアイは、海のない内陸部に位置しており、地下資源も観光遺跡もないことから世界でも無名の国であった。さらに日本国内でもほとんど知名度はなかったが、1995年1月にメルコスール（南米共同市場・ブラジル・アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイ）がスタートしてから一躍注目を集めるようになってきた。パラグアイ在住日系移住者8千人の農業面による貢献と日本政府のODAの強力な支援とで日本人のステイタスは非常に高い。

日本との絆を深めるこのパ国内に於いて独自のオピニオンリーダーとしての地位を高める『日系ジャーナル』は今後益々その重要性を増してくるものと確信している¹²⁾。

配達場所は、各移住地はもちろんのこと、パラグアイ国内にある各政府関係団体、各日本人会や県人会の施設が中心である。また日系人の経営するホテルや各種サービス施設にも配布されており、それらの多くは基本的に無料で読むことができる。これはたとえ個人で購読していても、日系人の活用頻度が高い場所では幅広く同紙が読まれていることを意味するものであろう。

3. “NIKKEI JOURNAL” にみる日系社会の一段面

“NIKKEI JOURNAL”紙の購読者は、邦字新

聞という性格上、殆ど全員が日系社会の住人たちであり、従って同紙がその社会における興味やニーズなどある程度足並みを揃える必要が生じるのは自明のことであろう。換言すれば、同紙上にみられる特徴に日系社会の一段面が反映されているとみなすこともできる。そこで本章では、同紙が重点的に扱う2点、すなわち現地における主流社会であるパラグアイ社会に関する記事、そして“NIKKEI JOURNAL”紙の真骨頂ともいえる日系社会について論じた記事を通じて、日系社会の求めるニーズとその表象のされかたをみていきたい。

(1)パラグアイを巡る記事と日系社会における受容

①メルコスールを巡る記事にみる南米地域とパラグアイ

南米諸国とパラグアイの関係について“NIKKEI JOURNAL”上で最も多く扱われる話題はメルコスール（南米共同市場）についてである。そこで本項目ではメルコスールを巡る同紙の記事に焦点を据えたい。「メルコスールにおける欠損額が400%増加」〔2006年5月15日付〕では、メルコスールに対するパラグアイの貿易収支について、加盟各国との関係性を比較しながら論じ、メルコスールにおける経済大国によるパラグアイの輸出の妨害が継続すれば、メルコスールにパラグアイが加盟する意義がなくなる、という、パラグアイ大統領ニカノールのコメントで記事を締め括っている。また、「ボリビアのガスをパラグアイとウルグアイに—南米の小国3ヵ国主導のガス・パイプライン構想—」〔2006年4月30日付〕では、ブラジルやアルゼンチンのような大国主導による天然ガスのパイプライン構想に拠らないもう一つのプロジェクトを紹介している。そしてその背景とし

て、製紙産業におけるウルグアイとアルゼンチンの確執、パラグアイとブラジル間の通商交渉の頓挫などを挙げている。「今回のミニサミットはメルコスールの大国メンバー、アルゼンチンとブラジルに対する明確な政治メッセージである」と結ぶこの記事においては、メルコスールを巡る一枚岩ではない各国の思惑を織り交ぜながら、メルコスールにおいてパラグアイが果たすべき役割を“NIKKEI JOURNAL”の立場から模索している。

このように、同紙をめくればメルコスール確立にむけて顕在化する様々な軋轢や問題点を政治的、経済的な観点から取り上げる記事は枚挙に暇がない。それは「海岸が無い600万人規模の経済後進国パラグアイは、パラグアイ単国ではグローバル化された世界で力が弱いのでメルコスールの1員として諸外国と交渉しなければならない」〔2006年4月15日付〕という考えの逆説的表現とも考えられよう。国際社会において目玉となるべき資源や産業を有しないパラグアイにおいて、メルコスールは自国の未来を左右する一大事であると同時に、もはや南米各国との諸関係を等閑視してパラグアイ社会を論じることとはできなくなっている。

メルコスールと比肩する南米地域における最大の関心事は、ベネズエラを中心とする中南米諸国の左傾化である。南米地域のみでも現在ブラジル、エクアドル、ボリビア、チリ、ペルーやウルグアイは左派系の大統領による政権下にあり、パラグアイやアルゼンチンは反リベリズムを標榜している。ただし、ベネズエラやボリビアなどの過激な反米左派と穏健左派諸国の間には温度差があり、またペルーのように再度親米化する国も現れ始めている。こうした混沌とした南米情勢は、当然のことながらメルコス

ールにも多大な影響を与えており、同紙でも度々取り上げられている。たとえば「ベネズエラが正式にメルコスール加盟国に（原文ママ）」〔2006年7月15日付〕では、南米最大の産油国であるベネズエラがメルコスールに参加することで巨大な経済ブロックが誕生し、国際舞台での発言力を増すといった対外的意義のみならず、メルコスールに内在する各国間の格差を埋める役割をベネズエラが果たすことを期待している。しかしその一方で、対外交渉の場で難しい舵取りが迫られる事態を懸念している。ベネズエラ大統領チャベスによるメルコスール軍創設の構想を紹介しているのは、その懸念の表れであろう。また、次号では「メルコスール首脳会談—ベネズエラが存在感高める（原文ママ）」〔2006年7月31日付〕と題し、「ベネズエラの加盟によってメルコスールの基盤が強まるという楽観論よりも、チャベス大統領の動向に左右されることで政治的な不安定さや欧米との摩擦が増すという懸念が強まっている」という経済アナリストの意見を取り上げている。そして、同会談にキューバのカストロ議長が招待されたこと、およびメルコスール加盟国とキューバの貿易拡大に関する協定が締結されたこともあわせて列記している。上記2点はいずれもトップ記事とそれに準じる扱いを紙面で受けており、パラグアイを取り巻く周囲の状況がいかに大きな関心事であるかが明らかであろう。

②日系社会からパラグアイ社会への眼差し

「日本らしさ」を紐帯とする小規模な集団である日系社会にとって、主流社会であるパラグアイ社会に関する情報が“NIKKEI JOURNAL”紙に掲載されることの有意性は一見すると殆ど認めることができないように思われる。また新

聞社側にとって、パラグアイ社会ではなく日系社会に関するニュースばかりを扱うことはマネリズムに繋がると同時に、本来新聞が持つべき広範な視野を失いかねない、という思惑も十分に含まれているであろう。さらに、日系人を中心として構成される読者にはスペイン語が堪能な者も少なからず含まれており、彼らは同紙に依らず現地メディアを通じて情報を入手することも可能である。

しかし、スペイン語が分からない者や地域的な利便性の悪さにより現地メディアに接することが困難な者にとっては、邦字新聞がもたらす情報は非常に有益であろう。そしてこうした条件をより満たすと考えられるのは、現地でスペイン語教育を受ける機会が少なく、また都市部から離れた場所で移住地開拓事業に携わると同時に、現在高齢化が進んでいる1世と考えられる。比較的小規模であり、かつ「日本らしさ」によってしっかりと結ばれたパラグアイの日系コミュニティにおいては、口伝えやその他の草の根レベルによる伝達手段によって日系社会内部のニュースは容易に入手できる。しかし、日系社会から一定以上の距離があり、日常生活に直接的に関係の無いパラグアイ社会の情報、なかでもグローバルな視野を伴い、世界のなかのパラグアイを扱うニュースに彼らが日常的に接する機会は多くないであろう。つまり、“NIKKEI JOURNAL”は、パラグアイ国内のニュースと疎遠になりがちな1世にとって、貴重な情報源となるのではないだろうか。

その一方で、パラグアイの経済や商工業を扱う記事は、近年増加しつつある都市部へ転住する若年層以上を中心とする日系人にとっても有益な情報となる。1世の多くが開拓移民として各移住地で日系社会を築いてきたこととは異な

り、生まれたときからパラグアイ社会と日系社会という2つの集団に同時に所属してきた2世グループは、移住地で家業である農業を継ぐという選択肢だけでなく、現地社会と深い関係性を切り結んだ仕事に就くことができる¹³⁾。彼ら2世グループを中心に特に商工業を営む者にとっては、国際的な競争力の脆弱なパラグアイの南米における位置関係を把握することは重要な作業であろう。ただし、スペイン語と日本語のバイリンガルが殆どである2世グループを中心にスペイン語を理解できる者にとって、速報性の点で地元メディアに劣る同紙によるパラグアイ国内の現状の把握はあくまでも副次的なものとなろう。

このように、“NIKKEI JOURNAL”紙の半分以上を費やして報道されるパラグアイ社会のニュースは、「日本らしさ」を紐帯とする日系社会に生活基盤を置くがゆえに外部の情報に疎遠となり易い遠隔地の日系人たちにとっても、あるいはその社会を出て都市部で新たな生活を営む者にとっても必要な情報であると考えられよう。

(2) 日系社会と“NIKKEI JOURNAL”

① 日系社会に関する情報の提供

“NIKKEI JOURNAL”紙では、ほぼ常設のコーナーとして「行事案内」を設けている。これは、各移住地で行われる催事を一覧にしたものであり、読者は何月何日に何がどこであるかを確認できる。また、それら行事のなかで特に重要、あるいは興味深い内容であると判断されたものについては、次号以降でその詳細が伝えられる。たとえば「熱戦だった第19回全青青年野球大会」[2006年2月15日付]では、2日間に渡ってイグアス移住地で行われた野球大会の様



写真3 行事案内とラパチヨ俳句会

出典 “NIKKEI JOURNAL” 2006年11月16日付第16面

を報じている。パラグアイ在住の日系人による全8チームの試合の模様を、イグアス出身で後に日本のプロ野球でも活躍した岡林洋一氏などのエピソードや「このような大会は日本文化の継承にも繋がり、意義あることだ」というラパス移住地の監督のコメントを交えながら紹介している。また、12月31日発行の同紙における「行事案内」では、アマンバイ、イグアス、ラ・コルメナ、ラパス、ピラポの各移住地で成人式が催される旨を案内しているが、次号にあたる新年特別号ではピラポ、ラ・コルメナ、ラパス移住地での成人式の模様を報道し、続く1月31日号ではイグアス移住地での成人式を掲載している。これらの模様は、アスンシオンやエンカルナシオンなど、都市部の日本人居住地における成人式の様子も含めて、写真、実名入りで伝えられ、各移住地における新成人の容姿と姓名とがひと目で判断できるようになっている。

また、同じく常設コーナーに「ラパチヨ俳句会」がある。これは同紙上における殆ど唯一の読者参加型の企画である。ただし、紙面をみる限りにおいては、投稿者はほぼ固定されており、また同紙側からのコメント等もないことか

ら、同コーナーを介した読者一般との双方向のやりとりには至っていないようである。

さて、先述した成人式における実名報道に代表されるように、6000人規模に限定された日系社会においては、個人の特定が比較的容易である。本人を直接知らなくとも、親類縁者や所属集団などを介した間接的な関係性のなかからある程度の接点を導出することができる。こうした社会の特徴を示すと思われる例として最たるものが「結婚おめでとう！」〔2006年7月31日付〕という記事であろう。これは、ピラポ移住地に行われた結婚披露宴を写真、実名入りで報道したものであるが、祝い事の最たる出来事とはいえ、基本的には結婚する当人およびその周辺にのみ直接的な影響を及ぼす行事を、新聞媒体を介して報道することは、日系社会による紐帯の強固さを示す好例ではないだろうか。他にも、日本人会に代表されるような日系社会に大きな影響を与えうる組織における人事の異動から敬老会の名簿、ゴルフ大会の受賞者まで、実名入りで報道される記事は枚挙に暇がない。またパラグアイの各移住地では、毎月数多くの行事があり、同紙に掲載されるだけでも月平均で10以上に上るが、読者は移住地に居ながらにして他地域の出来事の内容を知ることができるように配慮がなされている。

以上のように、“NIKKEI JOURNAL”の後半部においては、パラグアイ国内の日系社会に関する記事がニュースの中心を構成している。また他に目に付く記事として、他国、特にパラグアイと隣接し南米の日系社会をリードするブラジルの日系社会に関するものと、日本とパラグアイを繋ぐ出来事に関するものが挙げられる。しかし、ブラジルそのもの、あるいは日本そのものを扱うニュースは少ない。これは、前者に



写真4 「結婚おめでとう！」の記事

出典 “NIKKEI JOURNAL” 2006年7月31付第16面

においてはあくまでも隣国における日系社会の位置確認が主要な目的であるからであり、後者は日本のニュースを扱うことにおいて、その情報の速報性や多様性に関してインターネットやTVに匹敵できないからであろう。また、読者たる日系移民の大半は農業関連の職に従事しているが、農業に関する話題にはあまり触れられていない。これは、農業関連の情報は新聞よりもむしろ各移住地の農協のほうが詳しく、わざわざ新聞に記載する必要がないことを示すものと考えられる。

②日系社会を表象する“NIKKEI JOURNAL”

世代や地域、職業といった様々な要件によって同紙に期待される役割が変化するパラグアイ国内の記事に対して、日系社会を巡る記事は帰属集団を日系社会に置く全ての者にとって大きな役割を果たしている。現在、パラグアイにおいて“NIKKEI JOURNAL”よりも各移住地の行事を網羅し、包括的に扱うメディアは存在し

ない。特に同紙で紙面の多くが割かれる文化面の記事は、世代や職業を問わず日系社会に属する殆ど全ての者にとって最大の関心事のひとつであると同時に、彼らの共通理解を図ることができるものである。

これまで繰り返し述べてきたように、パラグアイの日系社会は「日本らしさ」をそのネットワークの根幹に据えている。それは教育面や年中行事のみならず、各移住地や都市部の日系社会における書道展や茶の湯の実演などに至るまで、日系社会の細部に渡ってみることができる。また野球のように外来のものではあるが多分に日本的な色彩を帯びたスポーツや、日本発祥のスポーツであるゲートボールなども積極的に受容されている¹⁴⁾。そしてそれらは、たとえば先述した野球大会を伝える記事における「このような大会は日本文化の継承にも繋がり、意義あることだ」というラパス移住地の監督のように「日本らしさ」との繋がりが恒常的に意識されたものである。“NIKKEI JOURNAL”は、こうした行事を積極的に紹介することで、日系社会の紐帯の結び目をより強くする役割を担っていると考えられる。ただし、同紙が果たす主な役割は、あくまでも日系社会を取り巻く様々な情報の周知であり、“NIKKEI JOURNAL”がパラグアイの日系社会において何らかのリーダーシップを発揮し、主導的役割を演じているわけではないことも指摘できよう。

各日本人会などの主催による種々の行事から結婚式までを掲載する同紙のあり方は、一般に想起されるような、いわゆる新聞とはやや体裁を異にするものである。ある意味で地域コミュニティ紙ともいえる同紙のありようは、同地の日系社会が6,000人規模の小集団であることに由来するものであり、見方によっては同紙が記

事とする情報の慢性的な不足を示すものでもある。しかし現地社会と一定の距離を保ち、視点によっては閉鎖的ともいえるパラグアイの日系社会にあって¹⁵⁾、「日本らしさ」によって結ばれた社会の構成員が最も関心を示す事柄は、帰属する社会の現状を正確に把握し、その認識を共有するための情報であろう。そして“NIKKEI JOURNAL”は「日本らしさ」を表象する様々なイベントを積極的に掲載することで、日系社会の集団に一層の連帯感をもたらし、「日本らしさ」を媒介とした日系ネットワークが破綻せずに機能している、という安心感を彼らにもたらすのではないだろうか。

本稿では「日本らしさ」を、日本的な国民性を表象するとみなされる種々のアイデンティティを内包する総体として捉えてきた。しかし「らしさ」という表現が示すとおり、その概念は非常に曖昧なものである。これは逆説的に考えれば、パラグアイの日系社会における個々の構成員が集団として機能を果たすためには、一定の曖昧性が確保される必要があることを示すものとも考えられようが、その考察は別の機会に譲りたい。むしろ本稿では、捉えどころのない「日本らしさ」を活字化＝可視化させることで、日系人を中心とする読者にそれを明瞭かつ理解可能な形で提示する役割を“NIKKEI JOURNAL”紙が担っている可能性を示しておきたい。

おわりに

現在、パラグアイの日系社会にも世代交代の波が押し寄せている。1世に代わって台頭しつつある2世グループは、これまでの文化を継承しつつも独自のネットワークを構築する過程に

ある。また、3世や4世にとって現行の学校教育は決して十全のものではない、とみなされている¹⁶⁾。現地社会への積極的な接近は、日本語を学ぶ機会や必要性を減退させ、将来的には日本語が日系社会の共通言語として通用しなくなる可能性も決して低くはないであろう。こうした現状からパラグアイの日系社会の紐帯は徐々に解体しつつある、とみなすこともできよう¹⁷⁾。特に現行の共同体は、日本語という共通言語によって所属集団の一人一人が繋ぎ合わされており、主用言語の移行はやがて日系社会に甚大な影響と変容をもたらすと思われる。そしてこうした時代変遷や世代間のひずみ、あるいはインターネットを中心とする情報ネットワークの長足の進歩は、“NIKKEI JOURNAL”にも否応なく大きな変化をもたらすものと考えられる。また実際に紙上においても、こうした社会変容を受けて正しい日本語を教える講座などを不定期に掲載するなど、新しい取り組みも行っているが、それらはいまだ試行錯誤のうちにある。減少傾向にある購読者数や、日本語よりもむしろスペイン語を得意とする新世代の新聞離れをどう食い止めるかは、今後の課題となり続けるであろう。

しかし現状においては、各移住地や都市部の日系社会において1世の主導する日本人会および関連組織の影響力はいまだ甚大である。すなわち「日本らしさ」を媒介項とするネットワークが即座に解体するわけではない。さらに新世代の日系人たちが目指すのは従来の日系社会からの離脱ではなく、その発展的継承であることも忘れてはならない。このような観点からすれば、新世代によってネットワークの再構築がなされたとしても、同紙が日系社会の現状を紹介し情報を伝達する限りにおいては、一定の役割

を担い続ける可能性も残されている。

他方で今日では、日系人の血を引かないパラグアイ人の子供たちが日本語を学ぶ傾向も見受けられ、これまでに於いて「日本らしさ」の再生産を担ってきた日本語学校のあり方も変わってきている¹⁸⁾。このように、日系社会全体がそのありようを問い直す時期に差し掛かるなかで、“NIKKEI JOURNAL”もその立ち位置を模索する必要に迫られている。

以上、本稿においては“NIKKEI JOURNAL”と日系社会の関係性について、新聞側からのアプローチに基づいた考察を行った。しかしながら、同紙が日系社会の中で育まれてきた媒体である以上、今後は同紙が日系社会に果たす役割を、社会の内側から再度見つめなおす必要があるだろう。そうすることによって、本稿で十分な回答を導出しえなかった、変容する日系社会における“NIKKEI JOURNAL”のあり方についても、より精緻な検証ができるのではないだろうか。

註

- 1) 福岡のような個人移住者は移民史においてしばしば軽視される傾向にあり、かつ史料的な問題から現地移住者の間においても忘却されがちである。
- 2) パラグアイの首都アスンシオン市の近郊で、ある会社の会計業務を行っていた佐幸田兼蔵という人物を嚆矢とする。また、2番目の移住者であり、アスンシオン市内における最初の居住者であるのは、1915年の冬にアルゼンチンのロサリオ市より転住した福岡庄太郎である。その後、幾人もの個人移住者を散見できるが、外務省による移住の公式記録には、個人による移住の記録は残されていない。
- 3) この点に関して端的な人物は、ホセ・ケイ・カナザワ前パラグアイ3軍最高司令官であろう。ラ・コルメナ移住地において1947年に造園業を営む日本人の父とパラグアイ人の母の間に生まれた金沢氏は、陸軍幼年学校から士官学校へと進学、2003年からは現大統領であるニコノール・ドゥアルテ・フルートス大統領のもとで陸、海、空軍を束ねる最高司令官に任命された。
- 4) レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キクムラ＝ヤノ、ジェイムズ・A・ヒラバヤシ、2006、p.76
- 5) カサマツ、2006、p.197 なお、こうした指摘はパラグアイの日系社会に接触する多くの人々からも異口同音に語られるものであり、筆者自身も同様の感想を持つものである。また、パラグアイの日系社会における日本語教育の歴史と現状に関する本稿の記述全般において、少なからぬ示唆をカサマツの論文から得た。
- 6) 同上、p.200
- 7) 同上、p.209
- 8) 同上、p.210
- 9) 高倉、2004によって同氏の経歴を参照した。
- 10) なお、1980年当時は『サンデーパラグアイ』紙という邦字新聞と競合していたが、ほどなく経営難のため『サンデーパラグアイ』紙は廃刊している。また、1963年からはパラグアイ新報社が『週刊パラグアイ新聞』を発刊する傍ら、ラジオ日系というラジオ放送を行っていたが、1976年に在パラグアイ駐在大使を誹謗する記事を掲載したことで社主の奥畑喜代明氏が国外退去命令を受け、新聞は発行中止処分となりラジオ放送も終了した。詳細は“NIKKEI JOURNAL”第655号、2006年を参照のこと。
- 11) “NIKKEI JOURNAL”ホームページ <http://www.nikkeijournal.com/>
- 12) 同上
- 13) 外務省経済協力局による1999年度の経済協力評価報告書によれば、首都アスンシオンに2世や3世を中心に約2000人の日系人が専門業者、自由業者および頭脳労働者として働くか、商業活動を行っている。また近年は金融業にも進出している。
- 14) これらのスポーツのうち、野球やゲートボールの他に相撲やバレーボールなども、全パラグアイ大会のほか、南米大会や汎アメリカ大会な

ど、さらに大きな規模で選手権が開催されている。これらは、他国の日系社会と自国を繋ぐ際に決して見逃すことができない役割をスポーツ文化が担っていることを示す好例となろう。また、パラグアイの日系社会においては近年特にママさんバレーが活況を呈している。

- 15) 国本は、「第三世界に浮かぶ『繁栄の小島』」あるいは「各移住地は特別自治区のような形で存在している」と表現している。詳細は国本, 2002を参照のこと。
- 16) カサマツ, 2006, p.213
- 17) 日本への留学なども含め、多くのパラグアイ人よりも高い教育を受け、更にスペイン語も堪能な日系2世や3世は、1世よりも比較的容易に現地社会の中流以上の階層に飛び込むことができる。こうして2世や3世は、日系社会やその文化への誇りを保ちつつ、ホワイトカラーとして現地社会で高い地位を獲得することとなる。こうした状況は1世と2世の間で少しずつ軌轢を生んでおり、たとえば2世グループの間で結成される「日系人会」は汎アメリカ日系人大会に定期的に出席する一方で、パラグアイ国内で行われる日系社会の行事のありかたを巡っては、必ずしも日本人会や日本人会連合会と足並みを揃えるわけではない。なお、エミ・カサマツ氏の研究に関してはEmi Kasamatsu, 2005を参照した。
- 18) カサマツ, 2006によれば、パラグアイの日本語学校における小・中・高校生の出自別生徒数を調査した2000年における統計(出典「みおつくし」1999, p.22)において、合計943名の生徒のうち日系人は616人、日系人と他人種間が187人、日系人以外が131人であるとし、またそれとは別にパラグアイ・日本人発展センターで開講している日本語クラスにおいては、受講生の殆どが日系人以外であると指摘している。

参考文献

- Emi Kasamatsu ed., 2005, *Historia de la Asociación Panamericana Nikkei Presencia e inmigración japonesas en las Américas*, Asunción: SERVILIBRO.
- Centro Nikkei Paraguay 6ta Convencion Panamericana Nikkei ed., 1992, *Nikkeipresente y fuerto*, Asunción: Centro Nikkei Paraguay.
- Michio Takakura ed., 12.2005-11.2006, *PERIODICO JAPONES NIKKEI JOURNAL*, Asunción: Nikkei Journal.
- 今井圭子「ラブラタ地域」国本伊代, 中川文雄編『ラテンアメリカ研究への招待』新評論, 2005
- エミ・カサマツ「パラグアイにおける日系人の日本語教育—日本の教育システムと移住地への影響—」レイン・リョウ・ヒラバヤシ, アケミ・キクムラ=ヤノ, ジュエムズ・A・ヒラバヤシ『日系人とグローバリゼーション 北米, 南米, 日本』, 人文書院, 2006
- 国本伊代「ボリビアとパラグアイにおける日本移民とメノナイト—“拒否された”外国人集団の受入れと定住の経緯を通してみた多民族社会の姿—」柳田利夫編『ラテンアメリカの日系人—国家とエスニシティ—』, 慶応義塾大学地域研究センター業書, 2002
- 中川文雄・松下洋・遅野井茂雄『世界現代史34 ラテンアメリカ現代史Ⅲ』山川出版社, 1985
- 中川文雄・三田千代子編『ラテンアメリカ・シリーズ④ラテンアメリカ 人と社会』新評論, 1995
- 湖上英二『日系人証明—南米移民, 日本への出稼ぎの構図—』新評論, 1995
- パラグアイ日本人会連合会編『未来への挑戦』, パラグアイ日本人会連合会, 1997
- パラグアイ日本人会連合会編『パラグアイ日本人移住50周年史—栄光への礎—』, パラグアイ日本人会連合会, 1987
- パラグアイ日本人移住資料館創設事務局『エピソード パラグアイを歩いた日本人—石井道輝遺稿集—』, パラグアイ日本人会連合会, 1993
- ミチオ高倉『にっぽんよ!』万葉舎, 2004
- 日系ジャーナルホームページ <http://www.nikkeijournal.com/>
- パラグアイ日本人会連合会ホームページ <http://federacion.hp.infoseek.co.jp/contenido/contenido.html>
- パラグアイ大使館ホームページ <http://www.embassy-avenue.jp/paraguay/index-j.html>

The Japanese-Paraguayan Community and “NIKKEI JOURNAL”
— Focusing on the succession of Japanese-Paraguayan generations
from Issei to Nisei and the transfiguration of the local Community —

YABU Kotaro *

Abstract: The group emigration of Japanese to Paraguay began in 1936, reaching its 70th anniversary in 2006. The local Japanese-Paraguayan community of approximately 6,000 people is linked by a strong network based on the Japanese language, and various events which take place at each settlement remain strong reminders of “Japanese-ness”. Meanwhile, the “NIKKEI JOURNAL”, the only Japanese newspaper in Paraguay, rewards broad expectations in the Japanese-Paraguayan community by picking up the recent situation of each settlement in detail, while also reporting Paraguayan civil affairs with an international outlook. On that point, this newspaper has the function of consolidating the Japanese-Paraguayan community network. But, the conventional network has been changing gradually with the succession of generations from Issei to Nisei. The “NIKKEI JOURNAL” is also necessitated to review its own place under the transfiguration of the basis of this community.

Keywords: Japanese-Paraguayan community, “NIKKEI JOURNAL”, the Japanese language and “Japanese-ness”, succession of generations, transfiguration of the local community

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University